遠寿院荒行僧（上）
集団脱走事件の真相と今

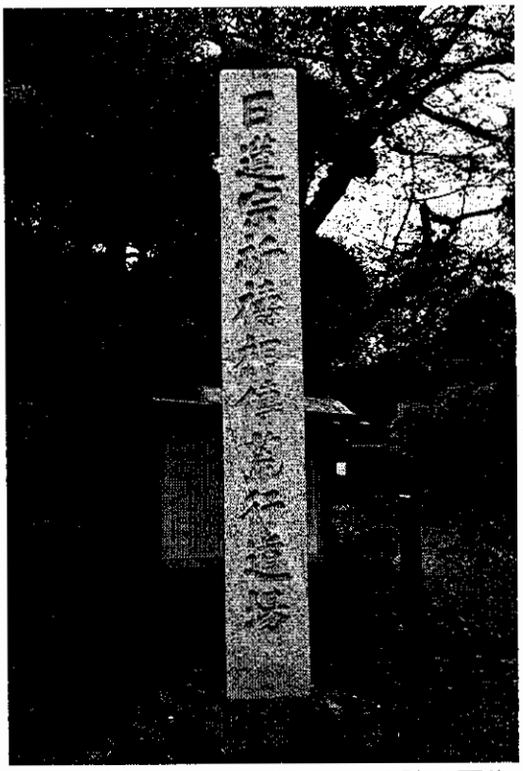
藤田 庄市 ジャーナリスト

シリーズ〈101〉

古い話である。1947年というから74年も前のことだ。だが、問題意識をもって事態を検証し現在の状況を凝視すれば、今日的な問題の解明と教訓が得られよう。

荒行で知られる日蓮宗の祈祷根本道場である遠寿院（戸田日晨伝師、千葉県市川市）から『正中山遠寿院加行門人帳』が6月に公刊された。元禄5年（1692）～昭和22年（1947）の256年間にわたる3966名の加行僧の起証文、誓約書、名簿類を、戸田氏が監修、都守基一氏（常円寺日蓮仏教研究所）が翻刻、解題を付したもので、A4判約500頁の大冊である。学術的価値の高いことはいうまでもないが、原慎定氏（立正大学仏教学部教授・同大学日蓮教学研究所所長）の「刊行に寄せて」の文末に、「（戸田伝師が）相当の覚悟をもって」本書を刊行したという、気になる一文がある。「覚悟」とは取りようによっては穏やかではない。

奇妙に感じたのは、時代区分としてさして意味がない1947年が翻刻の最終なのである。ところが該当年の頁を開くと驚くべき事実が読み取れた。初行僧58名（当初62名）のうち4名しか行を成満していないのだ。残りの54名はどうなったのか。解題には、入行60日目の12月29日、彼らは近接の法華経寺へ集団脱走したとある。その法華経寺は前年に日蓮宗を離脱し「中山妙宗」を名乗るという「不穏な兆候」があった。次いで、1949年には宗門自身が新たに身延山に「日蓮宗荒行堂」を開設し、遠寿院も行堂を再開したと、解題は淡々と続けている。



根本道場であることを示す遠寿院の石柱（2021年9月撮影）

現在、荒行は遠寿院荒行堂で行われると同時に、1972年に日蓮宗に復帰した法華経寺でも開堂される（昨年、今年はコロナ禍のため法華経寺は休堂。遠寿院は医学的対策を施し開堂）。法華経寺のほうは宗門直轄であり、入行僧も遠寿院よりはるかに多い。1947年の集団脱走事件は、じつは宗門行堂新設の契機となったのだった。その真相が、本書の刊行によって歴史的意味性もふくめ、ようやく明らかになろうとしている。遠寿院側の解説を踏まえて報告する。

7年前になる。戸田日晨氏は脱走した僧の一人から事件当時の行堂内の動きについて証言を得た。その老僧は62年前のことながら、なまなましく事態を語った。

「入行して何日かすると、堂内で飯がまずいと評判をたてる者がいた」

「入行早々から脱走するという話が堂内で流れ始め、久村諦道は初行僧に対し各県から脱走の為の代表を出せという指示をしていた」

久村諦道氏は脱走の首謀者であり、自身も初行であった。組織的に動こうとしていたことがわかる。

6月に公刊された『門人帳』

「石川県の代表になった宿波本積がいろいろ不満を作って、退堂を呻ったり、そそのかしたりしていた」

脱走の7日前、当時の先輩僧たちは、初行僧が行堂粛清の名目で伝師の命や自分たちの指導に服さず、行法を無視するなどの騒然たる堂内の様子を嘆願書にしたためている。そのなかに「外的な力」が働いているようだとの推測もあった。

「主に東京・関東の人達が画策をして、宗門の上の人々と連絡を取り合ってやっていたようだ」

「どんなふうに出るのかという、細かい指示も佐藤（恵俊）初行代表からあり、久村諦道の計画通り脱出に至った」

日蓮宗の教団幹部が関わった計画的なものであることが窺われる。

「脱走の瞬間、つっかい棒を開けて法華経寺に向かった。法華経寺の当時貫首だった宇都宮日綱上人は、『おう、よく来た。あなた方は気鋭の青年僧である』と言った。中山奥之院の東日教も来ており、その後は各々が勝手に水をかぶったり、講義を聴いたり、木剣の修行をした」

脱走を目撃した再行僧によると、突然、初行僧数十名が頭に布団をかぶり土塀を次々と乗り越えてゆくのを発見した。「お前たち、なにをする気か！」と言うと、首謀者らしい初行僧が「俺たちにはお偉いお方が応援してくれるんでえ」と

昭和22年12月29日
初行54名が法華経寺へ

捨て台詞を残し、ほかの初行僧を先導していったという（戸田氏が1977年4月聴取）。瞬間的、一気に54人が脱走したさまが彷彿とする。宇都宮氏の応答をみると明らかに事前の打ち合わせがあったことがわかる。初行僧たちが籠る場所や食事などに困ったという話はない。なお「木剣」とは日蓮宗の祈祷法である。

証言者の初行僧は遠寿院に残ろうと思っていたが、

「帰山の時、同県人が誰も来てくれなくなると思い、いっしょに脱出してしまった。県内の坊さんと仲良くなっていないと、帰山してから組で動いているので、不安感が常にあった」。

生活支配に及ぼす地域宗門のしがらみが、僧としての正邪の判断を曇らすことをいみじくも吐露した言葉である。

問題は事件後の展開である。日蓮宗宗務院は脱走者54名に許状を出し、修行が成満したと認めた一方で、当時の遠寿院伝師だった仲北日誠氏に対しては管理不行き届きを理由に懲戒処分（僧階降退）を下した。（あえてコメントはしない）

荒行が明けて間もない1948年3月の宗会ではある議員から次のような発言があった。

「百日間尊神に誓うて入行した者が54名決議案をつきつけて中山妙宗に脱出したということは、下剋上の行為であって妙宗で修法師相伝をうけた者に、本宗の管長が免許状を与えた事はこれ無効ではないかと思われます。また当局の宗制違反ではないでしょうか。遠寿院に於いて修行した者に許状を出すのが規則であるのに脱出したものに許状を出す事は理解できない事であります。取り消して貰いたいと思います」（『正中山遠寿院加行門人帳』443頁）

修行と法の伝授という伝統と正統性の論理、また、社会的倫理と常識からしても至極真っ当な意見である。だが、この仏教の根幹も、世俗倫理も一切蔑ろにして事態は進んでゆくことになる。

混乱のうちに1948年度の加行所の開堂は不能となった。

※参考文献　戸田日晨『荒行小論集』（遠寿院）、影山教俊『日蓮宗とは何か――日蓮宗加行所をめぐる戦後60年の光と影』（国書刊行会）

ふじた・しょういち／1947年東京生まれ。フォトジャーナリスト。日本写真家協会会員。著書に『行とは何か』（新潮社）『修行と信仰―変わるからだ　変わるこころ』（岩波現代全書）『現代山岳信仰曼荼羅』（天夢人）『カルト宗教事件の深層「スピリチュアル・アビュース」の論理』（春秋社）写真集『伊勢神宮』（新潮社）ほか多数。